

有機農産物基準問題と農業戦略論

中島 紀一（鯉淵学園）

輸入オーガニック問題から再浮上しようとしている有機農産物基準議論は、有機農業を農法転換をめざす総路線的展望の中軸に位置づけるのか、あるいは特産型農業の一類型として捉えるのかという認識の分岐を迫ることになりそうだ。この報告では、基準論議に関連して有機農業あるいは産直農業をめぐる最近の諸問題について農業戦略論の側面から論じてみたい。

議論の前提として、実態としての有機農業と、有機農業の発展を日本農業の中心的課題として位置づけようとする議論は、1980年代で一つの歴史的段階を超えたという認識を提起してみたい。

かつて多辺田らは、1970年代に開始された有機農業の実践的運動を、日本農業のあり方に対する根源的問題提起とうけとめ、しかし、その実践の営農的内実は当時まだ未成熟であり、また、有機農業にたいする一般社会の認識も低いので、歴史的な意味をもつ取り組みの初期段階のあり方として、実験的なものとしての提携、産直などの形態が必要なのだと論じた（多辺田ら『日本の有機農業運動』）。その後の経過は、多辺田らのこのような位置づけと見通しがほぼ現実のものとなつたことを示している。

たとえば、有機農業はとりあえず農業の特殊な一形態であるが、その存在は農業の全般的あり方、さらには食、教育、思想等のあり方を問うほどのものだという認識もほぼ一般的なものとなつた。また、営農実践の面でも、すぐれた有機農業経営も各地に育ち、有機農産物に関する消費者の支持や期待もきわめて高いものとなつた。

しかし同時に、80年代までの有機農業は、有機農業自体のその後の展開に十分な道を準備するものではなかつたし、ましてやその取り組みの単純な延長線上に日本農業の実際的な全体展望を描くことは無理だということも明らかにしてしまつた。80年代までの有機農業運動のこうした限界性を鮮明にしたのが有機農産物に関する基準議論であった。

極端に単純化して言えば、これまでの有機農業の中心的担い手たちは「提携の世界に基準はいらない」というだけの主張を繰り返し、消費者たちはより厳しい品質基準がほしいとだけ主張するに留まつてゐる。前者の有機農業本流の議論からは、有機農業への世論の支持を今後の農業展開に積極的に活かそうという意欲

は感じられないし、後者の消費者たちの主張からは日本農業の実態に踏み込もうとする姿勢はみられない。そこには有機農業の実態やこれからのあり方についてのリアルで厳しい認識、さらには日本農業の今後についての具体的展望にかかる示唆を読みとることはできない。

輸入オーガニック、WTOコーデックス有機農産物基準等は、消費者の声を背景としつつ、日本の有機農産物基準議論をより過激な方向へと導きつつある。コーデックス基準案が日本でそのまま適用されれば、日本の有機農業のかなりの部分が非有機農業とされるのは必至である。

しかし、有機農産物を他と明確に区別し得る優位な農産物としてその社会的位置を確立し、それをもって有機農業の発展に資するというような戦略路線を選ぶとすれば、合理的できちんとした基準を公的支援のもとに策定することは有意義だろう。その際、フランスのAOC（原産地呼称）制度は参考になろう。日本の有機農業の実態を踏まえるならば、有機農業を経営として発展させていくための努力——そのための方策はもちろん基準策定だけという訳ではないが——は、いまきわめて重要な意味をもっているように思われる。

だが、有機農業を他と区別される存在として規定し、その自己規定を営業的独占に活用するという道は、有機農業を一つの軸として日本農業のあり方を組み立て直そうとする運動に対しては分裂的要素を持ち込むことにならざるを得ない。

日本有機農業研究会の設立趣意書に端的に示されているように日本の有機農業運動は、有機農業を一つの理想として掲げつつ、日本農業の農法構造のあり方を組み立て直そうとするさまざまな取り組みの共同戦線の構築という方向を志向していた。産直農業などとも重なりつつ、農法転換をめざす戦線は幅広く構築されてきた。かなりの成功とみてよいだろう。その際の重要なポイントの一つは有機農業を狭く定義しなかったという点にあった。

もし、日本の有機農業が、基準によって狭く自己規定するという戦略を選ぶとすれば、有機農業は日本農業の農法転換への共同戦線の主役としての位置を明確に放棄すべきではなかろうか。農法転換をめざす共同戦線における政策課題のほとんどは（安全性等のテーマも含めて）、基準によって狭く規定された有機農業固有のものではないし、基準によって排除される非有機農業も含む多様な主体によって担われる共同戦線において、狭義の有機農業がアブリオリには共同戦線の中核となり得ないことは当然だからである。

およそ以上のような局面認識を踏まえるならば、90年代における有機農業は、一方でいわば特殊な農業としての自立を図るというごく当たり前の課題を追究しつつ、他方で、日本農業のあり方を問い合わせ直そうとするさまざまな運動は、有機農業に安易に寄りかかるのを止めて新たな戦線構築に進む、という戦略的展開にならざるを得ないのではないかと思われる。